
奇機械怪（ききかいがい）

社怪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇機械怪ききかいかい

【Nコード】

N4382M

【作者名】

社怪人

【あらすじ】

機功士、屋形鉦作がお得意様から鑑定のお礼として貰った（押し付けられ）た変てこな機功は、
だった。

「現代」に嫌気がさした「はるかな未来の日本人達」によって「魔改造」されちゃった「日本皇国」で……
特に何ということもなく平凡？ な日々を過ごす「機功士」とその
周辺の人々のお話。

の、つもりなんです……平凡に過ごせるような気がしないw

えと……一応SFジャンルに入るんですが、「すこしふしぎ」な、SFだと思いますw

サイト「no-seen flower」にて行われた「闇鍋企画」に投稿した作品に加筆修正した作品です。

(前書き)

ども、社怪人です。

この作品は、以前「闇鍋企画」に投稿したものにかなり加筆修正したものです。

以前どこかで読んだな、思われる方がいらっしやるかもしれないが、読んでみて損はさせません……と、言い切れたら気分いいだろうなあw

ま、よかつたら読んでやってくださいまし。

社怪人でした。

はじめに

この物語は……

異世界……ではなく『こんな世界なんていややつ！ 未来を変えたるんやつ！』と、はるかな未来世界からやってきて、

時の権力者に取り入って過剰な干渉をし（まくつ）た【土岐衆とぎしゅう】（歴史書には「土鬼衆」「時衆」等とも記されている）と呼ばれた連中によっていじくり放題にいじくり回され、

挙句の果てに蝶の羽バタフライばたき効果によって【土岐衆】そのものも時間タイムの矛盾に飲み込まれて消え去り、

それから更に三百年ばかり過ぎ去って、一般庶民には『土岐衆？なにそれ？ おいしいの？』となってしまった時代の、

『ニッポン 日本皇国』が舞台の『フィクション お話』です。

……なに？ 十分異世界じゃないか、って？ それはそうかもだな（笑）

序 機功

機功【き こう】

人間の氣 フアラナ 生体力素 フリイエナジイ や太陽光線等の自然力素によつて作動する機械装置の総称。

応用範囲が広く柔軟性が高い。汎用性もある。薪や石炭等から力素を得ること無く使えるが、個人個人の資質により使用条件が異なってくる。

前述の理由により使用者への調整が必要なため複雑な装置の量産は難しい（出来ないわけではない）。

主生産地は日本皇国。諸外国（英王国・欧州・北亞米利加合州国）への主要輸出品。

四八〇年版より抜粋）

（「万能社百科事典」皇紀二

一 贈り機功もの

ぼくの名は屋形鋤作やかたこうさく。

央都おうち一の歡樂街、風流町ふうりゆうの裏通りかたすみで機功きこう工房を開いている一介の機功士だ。

メイド この風流町ふうりゆうで使われている機功きこうの面倒めんどうを見ながら、頼まれた機功きこうを製作メイクトしながら、新しい機功ものを開発しながら、日々を生きている。

一級機功調整修理技士と一級機功鑑定士の資格は持つてるので素人ではない。念のため。

さて、今、ぼくの目の前には『なんだかよくわからない機功』が鎮座している。

つい先ほど工房前に いろんな書類と一緒に嚴重に梱包されて届けられた『機功』は梱包を解いて一見したところ、薄汚れた正体不明のがらくたにしか見えなかった。が、工房に持ち込み、もの自体を洗浄してみると……

まず本体は「白い卵」たぶん大駝鳥の卵の殻かなんかを使っているんだろうと思われるが、蹴球競技の球ほどの大きさで、縦横無尽に分割線が入った楕円球だ。

その表面に様々な機功の部品 素子、端子、伝導管から基盤まで を脈絡なく貼り付け、組み込み、ご丁寧の一部は溶接までしている。

力素伝導管が付いていたので思いついて力素を送り込んだら分割線に沿って光り出し……すぐ消えて、それだけ。

正直、本当になんなんだか、わからん。

単なる機功部品の組み合わせ、子どもの遊びの似非芸術作品、にしては使われている素子端子基板導管類が 製造当時の 技術的には最高精度の物が使われている（外に付いている使用部品の総額だけで一流料亭で大宴会開ける程度はする）のが解る。解ってしま

う。

伊達に一級機功鑑定士は持ってないのだ、うん。

ぼくは洗浄されて綺麗になったが、ますます正体不明さが増した

機功がらくた部品の塊を前にため息をついた。

どうしてこんなものがぼくの元に届けられたのか、それは一月程前に遡さかのぼる。

二 百年蔵

百年蔵

央都一の歓楽街、風流町の表通りに建つ創業二百年の一流大料亭「守谷亭もりや」。
その敷地内にある巨大おおなる機功の塊。

今から約百年ほど前、四代前の亭主、守谷三右衛門氏が生涯かけて蒐集した書画骨董と機功を収めている、と、伝えられている時限タイム閉閉式機功蔵である。

三右衛門氏が設定した閉蔵期間は、百年。なぜそんな酔狂な真似をしたのかは未だに謎のままである。

もちろん、その間央都に何もなかったわけがない。

数度にわたる暴動に戦乱、賊に狙われたことも何度となくあったと言っ。

七代目当主の守谷亭七右衛門氏は語る（以下略）

（民明書房発行「央都名処百選探訪」の「百年蔵」の項より一部抜粋）

「きれいなもんでしたねえ……埃一つ見当たらない。百年間まったく手入れも掃除もされなかったと言っのに」

開かれた「百年蔵」の收藏品を一つ手に取り、箱眼鏡ゴケル、通称、「自在眼」。機功土用の便利道具の一つで覗いて鑑定みつもりしながら、屋形鉾作ぼくは守谷亭さんに話しかけた。

四十畳敷きの大広間を二つ、障子に襖に畳を全て取り外して置き台を並べ、そこに店の男衆を総動員して蔵の収蔵物を並べる。

言葉くちで言えばそれだけの事を終えるのに、半日ばかり。三右衛門氏の蒐集物がそれだけ多かった、と言っ事だ。

蔵の中から出てきたのは、百年前でも既に貴重だったと思われる書画骨董から日常生活用品玩具に、機功。

まあ……何と言っか無節操に集めるだけ集めました集めるのだけが目的でした（この道楽者があ！）、と言った品々の数々。

で、ぼくは最重要顧客おんくごにして地主さん、もちろん、家主さんでもある。守谷亭さんから頼まれて、收藏品の機功と生活用品、玩具の鑑定をしているところだ。

收藏品の書画骨董担当は央都一、との評判ほまれ高き骨董商の安国堂さん。

さつきからしきりに『むう』とか『ほお』とか言いながら柔和な顔が崩れっぱなしである。

この数寄者。

「どうやってだかはこのから詳しく調べなければ判りませんが、蔵の中を真空状態に保つ機功きこうでも組み込まれていたんでしょ……まったく三右衛門翁おきなって人はとんでもない道楽者だったようです。と……

さて、二週間後には展示会を開きます。それまでに鑑定と修理調整をお願いしますよ」

守谷亭さんも皇国くに中の数寄者、粹人、学者に新聞社その他有象無象から『蔵が開いたらぜひ展示会を開いてください』と頼まれ、これはいい商売の機会ねたになると喜んでる。

かくして二週間後、央都の私立御剣博物館みつるぎで『守谷亭百年蔵収蔵品展』が開かれ、大盛況となったのだが……それはまた別の機会にお話できればするとして……

この日、ぼくや安国堂さんや男衆 部外者 が夕方になって一旦引き上げた後、何気なく空っぽだった筈の百年蔵に入った守谷亭さんが見つけたのが、隠し部屋。

そして、中に安置しまわされていたのが、この機功がいくた部品の塊。だったと言っ事、らしい。

機功ものに付いてきた守谷亭さんからの説明が書かれた手紙には、『
実はあの後、蔵から隠し部屋が見つかったちゃってね、そこから出て
きたんだけど目録にも記録してないし、君の働きに感謝してこれを
あげるねっ、ぜひぜひ貰ってくださいよろしく、絶対に返すなんて
いわないでねっ』

と、普段の落ち着きっぷりとは裏腹のはっちゃけた送り状に、厳
重な梱包材にわざわざ『贈り物 守谷亭』と書かれ張り付けられた
熨斗のし紙と、ついではよく名義の所有権登録証 登録証これってけっこ
う登録料高いんだよ まで付けて届けてられた、機功これ。

どう見ても考えても『厄介払い』ってやつだよな？ 書類これ。

でも、何でそんなにしてまで厄介払いしたかったのか？ この時
のぼくには解らなかった。

翌日、顧客おなじみの料亭、上州屋さんから頼まれた機功かまど竈の掃除と調整
と部品交換を済ませて工房みせに帰ってくると……

戸締まりはきちんと ぼくの組んだ機功かまど錠前だ、生半はんぱな腕では
生体鍵かぎ無しで開けられるはずもない した筈ななのに工房なか内で何か
が動く音がする。

所謂ひとりもの気楽な独身者、身軽な身ではあるものの、工房みせ内に置いてる
商売道具しなモノは、そんじょそこらの品物ものでない。

盗られたら無くなったら飯おまんまの食い上げになってしまう。

と、言うわけで錠前かぎを開け、そうっ、と引き戸ひき戸を開け、中に入り、
そうっ、と閉めて錠前かぎを閉め。

工房内を見たら、

謎の機功しるいたまじが工房の中を転がりまわってました。

薄ぼんやり光って、分割線から青白い光をちかちかさせて、ぶつぶつぶつ唸るような音立てながら。

いや、良く良く、よく、解りました。

守谷亭さん……あんた……あんたなんちゅうもんぼくに押しつけてくれたんですかあゝ!?

四 生誕

それから……

成長と言つか、進化と言つか、変態と言つか、変形と言つか……
始めたんだな機功こねが。

数日後には卵の上部がぽんつ、と開いて双眼鏡のようなものが出てきてあちこちきよろきよろし始め、底がぽんつ、で三角形に組まれた車輪が一对出てきて勝手に自分で動き回り始めた。

それらの形状を見てどっかで見たような、と部品棚の箱を調べたら……

やられた……やられてた……

ほとんどは廃機功こわれたものから『まだ使えるから』と取り外して保管していた部品だったけど、視覚基盤とか導力装置とか増幅鉱石とか……まあそれなりのお値段がするものもなくなって、こいつの部品になっ
ていた。
なんとか機功こいつと意思疎通できなければ、更に何か貴重品たかいものがやられるかもしれない……

ちなみにバラして必要な部品とって捨てる、ってのは論外。
こんなわけのわからんでも百年蔵の收藏品。捨てるなんてそんなもつたいな……歴史を冒流まねするような事ができるわけがないっ！
こつという訳わからんものを自分の思うがままに扱えてこそ、一級機功調整修理技士つてもんなのだっ！

ぼくは、ふと思いついて中古の伝話器でんわきをこいつの前においてみた。
いや……思いついただけで特に根拠はなかったんだけど。

すると

ぱくん、と腹に相当する部分が開き、中から手としか言いようのないものがぬうつ、と出てくると伝話器をわしつと掴み中に入れて……『目』も『足』も中に引き入れて元の『卵』に戻って動かなくなっ
た。

動かなくなっただけで絶えず『殻』の中からは「かりかり」だの「かちやかちや」だのたぶん再構成しているような音がずっと聞こえてはいたのだが。

で、三日後。

「なんでさ？」

『卵』の殻がぱっくり割れて、中から猫耳で、背中から小さな蜻蛉のような羽根が生えた三寸程の背の高さの妖精っぽいもの、が産まれましたとさ。

しかも、ぼくを見て、

「おとう・さま？」

「きみ、だれ？」

「わたし・つくも・です」

「つくも？……つくもって……付喪神！？」

「はい・それ・です……たぶん」

「な、なんでさ？」

「うまれる・ちから・たりなかった・のを・おとう・さま・が・くれ・ました」

「機功から産まれた新世代の付喪神、ってことなのか？」

「しんせだい・いみ・わかりません・わたしは・つくも・です」

あははは……ほんと、とんでもないもの貰っちゃったよ、これ。

と、丁度その時を待っていたかのようにがらがらつ！と工房の引き戸ひき戸が開く音がして、どたどたと！と駆け込んできたのは守谷亭氏。

「す、すまんっ！ 鉦作君っ！ この前の話は無かったことにしてこの前の品物を返し……あらら？ ……お、遅かったかっ！」

ぼくと付喪神を名乗る妖精っぽいものを見てがっくりとひざを着

く。

「今日、隠し部屋から新たに三代目の残した録音盤が見つかって、機功から産まれる付喪神の卵を作ったから面倒見てあげてね、実はあの蔵の品物はみんなこれから目を逸らすための罠だったんだよ。じゃあよろしくねえ」って入ってたんだ」

「でも、夜中にごろごろ動くはぶつぶつ言うはで店中の者が気味悪がってね」

「厄介払いに君のところへ贈り物にしちゃったんだけど……返してくれないよ、ね？」

……丁重にお引き取りいただきました。

こうして、ぼくの工房に住人が増えた。

なぜかぼくの頭の上がお気に入り、お陰でぼくの頭は鳥の巣のようになってしまうている。

名前は「きき」ぼくがそう名づけた。

奇妙な機功から産まれた付喪神、奇妙な機功の神様だから「奇機」

なかなかいい名前だと思わないかな？

その後、ぼくは付喪神が憑いている機功技士兼鑑定士として業界的には有名人になり、ききと共に色々な面倒ごと 奇機械怪な話に巻き込まれていくことになるんだけど……

それはまた、機会があればお話しすることにしてゆづ。

(後書き)

社怪人です。

あとがきを読んで下さってる、言っていることは最後まで読んでいただけ
たと思って間違いないですよ？

お読み下さりありがとうございます。

出来れば読んだ勢いで感想など書いてやって下さいませ。
よろしくお願い致します。

社怪人でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382m/>

奇機械怪（ききかいかい）

2010年10月9日04時58分発行